

新型コロナウイルス陽性および疑い患者に対する外科手術に関する提言

一 日本小児外科学会からの追加提言

日本小児外科学会

新型コロナウイルス陽性患者および疑い患者に対する外科手術に関して、すでに日本医学会連合ならびに日本小児外科学会を含む外科系諸学会から詳細な提言がなされている。

<http://www.jssoc.or.jp/aboutus/coronavirus/info20200402.html>

この提言は医療従事者を感染から守ることが最優先事項の一つであることが強調されているが、小児外科医にとってもそれは変わることはない。小児外科医、あるいは小児外科診療施設は他診療科と比較しても限られており、小児外科医、あるいは小児医療チームの感染は地域の小児医療の崩壊につながる危険性が極めて高いことを念頭に置き、小児外科手術の適応決定、手術時の感染予防に対して極めて慎重に判断、ならびに施行しなければならない。

基本的な考え方は上記提言に従う。

1. 特に、エアロゾルを発生しうる処置（気管挿管および抜管、気管切開、マスク換気、気管支鏡、胸腔ドレーン留置、消化器内視鏡、消化器などの電気メス処置、腹腔鏡など）に際しては飛沫感染のリスクが高まることを認識する。
2. 個人用防護具（PPE: Personal Protective Equipment）の使用にあたっては上記提言で述べられている原則を順守し、各施設で作成した指針に従う。
3. 電気メス使用にあたっては、排煙装置を用いる。
4. 腹腔鏡手術にあたっては、高精度フィルターおよび排ガス装置などの条件を必ず確認したうえで実施する。

不十分な感染予防体制のもとで手術を施行することに伴う感染の蔓延は絶対に防がなくてはならない。自施設の医療体制によっては近隣施設への患者搬送をためらってはならない。

ここでは、小児外科医が直面する問題点について、提言を追加する。

1. 小児外科疾患のトリアージ

外科手術トリアージの目安として疾病レベルが3段階に分類されている。

<http://www.jssoc.or.jp/aboutus/coronavirus/info20200414.pdf>

- A：致命的でない、または急を要しない疾患
- B：致命的でないが潜在的には生命を脅かす、または重症化する危険性がある疾患
- C：数日から数ヶ月以内に手術しないと致命的となり得る疾患

米国外科学会が推奨するトリアージガイドライン(<https://www.facs.org/covid-19/clinical-guidance/elective-case/pediatric-surgery>)をベースとした代表的な小児外科疾患の手術トリアージの目安を表（小児外科手術トリアージ）に提示する。

2. 新型コロナウイルス陽性妊婦から出生した新生児の緊急手術について

わずかではあるが、新型コロナウイルス陽性妊婦から出生した新生児の新型コロナウイルス陽性例の報告が見られる (<https://www.jsnm.com/Teigen/docs/teigen200416.pdf#zoom=100>).

可能であれば手術前に PCR 検査を施行する。PCR 検査陽性あるいは PCR 検査未施行の新生児の手術に際しては陽性患者に対する手術と同様に PPE フル装備で手術を行う。

中国からの報告において新型コロナウイルス感染中の患者の手術例の殆どが肺炎を併発し、死亡率が 2 割程度あったとの情報もあり、他に保存的治療手段がある場合には可及的に陽性者の手術は避けた方が良いと考えられる。

国内外における新型コロナウイルスの感染蔓延状況、医療体制は日々刻々と変化している。これらの変化に柔軟に対応することが求められる。

新型コロナウイルス感染症蔓延期における小児外科疾患・手術トリアージの目安

医療供給体制*1				安定時		ひっ迫時	
対象患者の新型コロナウイルス感染の有無*2				陰性*4	陽性・疑い	陰性*4	陽性・疑い
疾病レベル*3	A	致命的でない、または急を要しない疾患	鼠径ヘルニア 精巣固定術 良性腫瘍 噴門形成術 胃瘻造設術 直腸肛門奇形（根治術） ヒルシュスブルグ病（根治術） 漏斗胸手術 など	適切な感染予防策を講じたうえで慎重に実施	延期	延期	延期
	B	致命的でないが潜在的には生命を脅かす、または重症化する危険性がある疾患	気管狭窄症 単純性腸閉塞症 先天性胆道拡張症 先天性嚢胞性肺疾患 など	適切な感染予防策を講じたうえで慎重に実施	延期、ただし病状の程度・進行によっては疾病レベルCに準ずる	延期、ただし病状の程度・進行によっては疾病レベルCに準ずる	延期、ただし病状の程度・進行によっては疾病レベルCに準ずる
	C	数日から数ヶ月以内に手術しないと致命的となり得る疾患	食道閉鎖症 先天性消化管閉鎖症 高位・中間位鎖肛に対する人工肛門造設術 無瘻型低位鎖肛（根治術） 急性虫垂炎 絞扼性腸閉塞症（腸重積症を含む） 穿孔性腹膜炎 気道異物 胆道閉鎖症 悪性腫瘍（生検を含む）など	適切な感染予防策を講じたうえで慎重に実施	代替治療を考慮し、やむを得ない場合のみ十分な感染予防策を講じたうえで慎重に実施	代替治療を考慮し、やむを得ない場合のみ十分な感染予防策を講じたうえで慎重に実施	代替治療を考慮し、やむを得ない場合のみ十分な感染予防策を講じたうえで慎重に実施

* 1 当該地域・医療機関における病床数、医療スタッフ、個人防護具(PPE)、新型コロナウイルス感染症患者の受け入れの有無、緊急事態宣言の有無、地域における感染拡大の程度などの様々な要因をふまえ総合的に判断する。

* 2 新型コロナウイルスPCRによる診断が望ましいが検査できない場合は、過去2週間程度の症状や海外渡航歴・移動歴・濃厚接触の有無（本人及び同居者）、必要であれば胸部CT所見などをふまえ総合的に判断する。

* 3 疾病の重症度、緊急度、必要性、患者の容態などを総合的に考慮し、主治医を中心とした医療チームで協議して判断する。患者状態によっては繰り返しの疾病レベル判定が必要な場合がある。

* 4 不顕性患者も多く、またPCR検査でも一定程度の偽陰性があるため確定診断は容易ではないことを認識し、院内マニュアルに従って適切な感染予防策を講じる。